

simc News Letter

Sendai International Music Competition

2025年7月号

仙台国際音楽コンクールニュースレター ②

第9回仙台国際音楽コンクール ヴァイオリン部門コンクール評

音楽評論家：松本 學

第9回を迎えた仙台国際音楽コンクールのヴァイオリン部門。例年と異なり、飛び抜けたコンテスタントが見出しにくく、いささかしっくりこない後味を感じたセミファイナルに次いで、ファイナルと入賞者記念ガラコンサートを聴いた。

ファイナルの課題曲は、前回、前々回と同様、モーツァルトと任意の作曲家によるコンチェルトの2曲。最高位の第2位となったムン・ボハは、

音が美しく、端正で流麗なモーツァルト。同じ音型の繰り返しでも音楽が盛り上がるように巧みに、しかし自然な音楽を聴かせた。しかし特記すべきはもうひとつのブルッフだ。最初の音、フレーズを発した途端に、作品へのイメージのブレのなさ、音と歌の豊潤さに「彼女が最高位となるだろう」と確信した。まさにコンクールの途中で生じるマジックのような瞬間だ。オーケストラの演奏もよく聴いており、一際目立つフルートやホルンとのデュオ的パッセージも見事に合わせていた。

第3位のジャン・アオジュはモーツァルト第5番の序奏をきわめて丁寧に作り込んでいた。音も明瞭で、ヴィブラートの種類も多い。ただ第1楽章で驚くほど音が小さかったのには疑問が残る。一方チャイコフスキーでは、こちらも冒頭をかなり丁寧に扱いスタート。かなり弾き込んだ安定感があり、全体としても完成度が高い。欲を言えば、早い段階でマックスに到達しやすいので、両端楽章のコーダでさらにパワーを感じさせる設計がほしかったか。

第4位となったのはリ・ジンジュ。セミファイナルでは彼女がほぼトップだったと思う。メンデルスゾーンの優れた完成度もだが、特にモーツァルトの《カッサシオン》でのアンサンブルへの目配り、ノン・ヴィブラートをベースとした音色や様式への配慮が見事だったからだ。ファイナルのモーツァルト第4番では多少の乱れはあったものの、修正力も確かで、全編にわたってしっかりと聴かせた。ハイフェッツのやや過剰とも言えるカデンツァも彼女の高い技巧で楽しく聴いた。

シベリウスでも音質、音色ともに充実。ヴィブラートの使い分けも巧み。ただ緊張からかやや固く、スケールが小さくなってしまったのが惜しかった。しかし、とても優れた才能だと思う。

裏面に続く。



第5位のパク・ソヒョン。モーツァルトは第5番。丁寧に作り込んだ第1楽章序奏に始まり、美しい音楽を聴かせたが、全体に流麗さがかってしまい、情報量が薄い。ストラヴィンスキーでは、彼のテクニックの優秀さは十分に伝わった。フレーズごとの音色やキャラクター変化が課題か。またこの曲に関しては、オケとの一体感が足りず、洒脱感に欠ける結果ともなった（コンマスとのデュオ部分は素晴らしい）。

第6位キム・ハラム。いよいよハーデリヒ（41歳）の門下がコンテストとして登場してきたことにも驚く。モーツァルト第5番では前奏も途中まで一緒に演奏。ソロはしっかりした音でくっきりと。長いカデンツァは意欲の表れだろう。第2楽章も丁寧なヴィブラートでじっくりと歌い込んだ。ここでも重音を駆使したカデンツァを披露。フィナーレでも全てのキャラクターをじっくりと表現しようとするのは好感が持てる。ただ、やや重くなりすぎ、モーツァルト的でなくなってしまったのが難しいところだ。

チャイコフスキーはオーソドックスなアプローチかつ全編丁寧な取り組みで素晴らしかった。音質やピッチが荒くなる瞬間が散見されたのが惜しい。フィナーレのフラジョレット部（393～399小節）をテンポを緩めることなくインテンポで進めたのはハーデリヒ仕込みか。

同第6位のレイ・ハイルイは、モーツァルト第1番では安定して流麗な演奏を聴かせた。やや平板だったことと、細かな部分がより明瞭になるとさらによかったと思う。バルトーク第2番は、技巧の洗練だけでなく、セミファイナルでも驚かされた音の存在感が見事だった。太さや鳴りのよさは群を抜く。楽器は英国製のアマティのコピーと言っていたが、発音や体重の乗せ方などボウイングが秀でていることもあるだろう。彼の強みとなるに違いない。

以上ファイナルの短評だが、今回第1位が出なかったことはファイナルのみならず、各ラウンドを通じて、予想できた結果で、妥当だと思う。

翌日の入賞者ガラでは、3名ともコンクールのストレスから解放された伸び伸びとした音楽を聴かせた。リ・ジンジュはテンポ、音色、ピッチなどどれも整い、完成度の高い充実した演奏で、これがファイナルならば結果が変わっていた可能性を感じた。

ジャン・アオジュも神経を張り詰めていたファイナルから、リラックスが加味。中でも第2楽章〈カンツォネッタ〉中間部でフルート次いでクラリネットと続くデュオは情緒たっぷりで、まるで《オネーギン》のアリアの世界のような味わいがあった。

ムン・ボハはファイナル同様の完成された演奏で、聴く者にストレートに作品の魅力を伝えた。

結局、終わってみれば今回も充実した回であったことを実感。気が早いですが、第10回となる次回への期待が高まった。